

波照間島の鳥類と哺乳類

嵩 原 建 二

(沖縄県立博物館)

The Birds and Mammals of Hateruma Island in Yayeyama group,
the Ryukyu Archipelago.

Kennji TAKEHARA⁽¹⁾

〔はじめに〕

波照間島は日本最南端の島で、北緯 $24^{\circ}01'$ ~ $24^{\circ}03'$ 、東経 $123^{\circ}45'$ ~ $123^{\circ}48'$ に位置し、八重山諸島の石垣島から南へ約40kmの洋上に浮かぶ、島面積14.96km、周囲14.62kmの小さな島で、島の最高標高も59.90mと平らな島である。

島の人口は600名足らずで、島の中央部にフクギに囲われた北・南・名石・富嘉の4集落があり、それぞれに分かれて住んでいる。主な産業はキビ作を中心とする農業で、波照間製糖(100t工場)によって黒糖が生産されている。このため農業基盤整備事業による土地改良等が進行し、島のほとんどの面積がキビ作農地で占められ、その他にはわずかに牧草地や芋畑などが散在する。したがって、森林地域が少なく、島の中央部の集落近くの拝所(御嶽)や島のまわりのフクギやテリハボク等の防風・防潮林などでわずかに残存されているだけである。

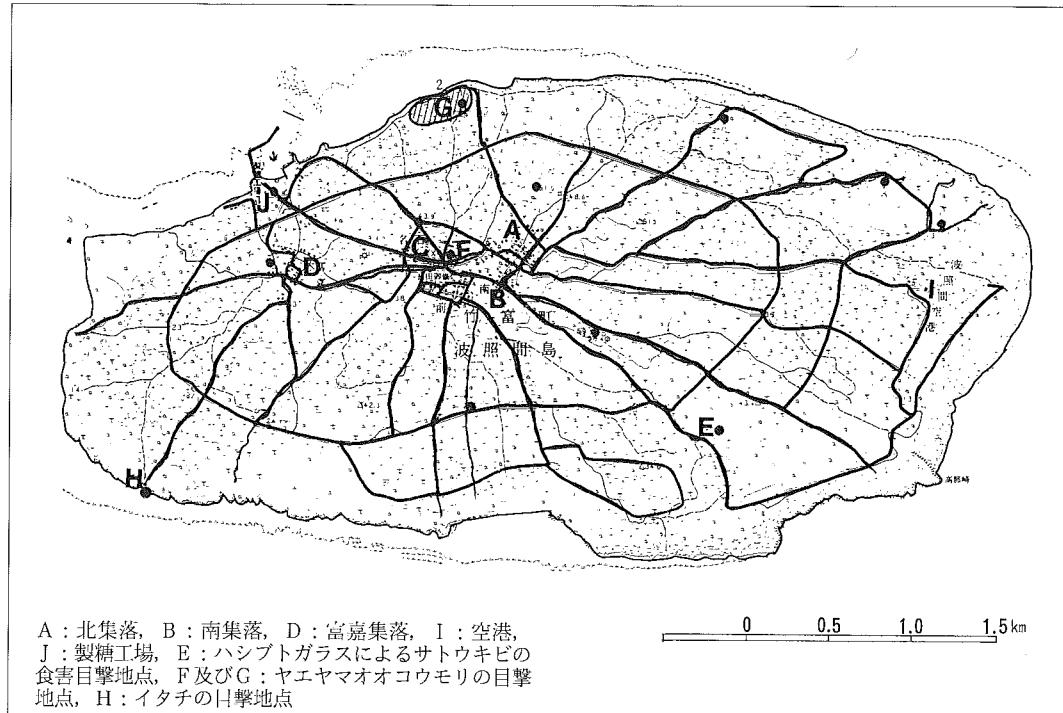
この島に人が住み始めたのは今から約3700年から3800年前と言われ、その遺跡が島の北側海岸に面した下田原貝塚とされる(沖縄県教育委員会、1986)。このような古い歴史を持つ島で、豊年祈願祭である「ムシャーマ」などにみられるように信仰や祭祀、芸能などが古い形で伝承され、民俗的に豊かな基盤を持つ島である。

筆者は1993年1月21日から1月26日まで波照間島に滞在し、鳥類と哺乳類についての観察を行い、いくつかの知見を得たのでここに報告する。

この報告が波照間島の動物相を理解する一助になれば幸いである。

(1) Okinawa Prefectural Museum

図1 波照間島における集落の分布及び主要施設とカラスによるサトウキビの食害目撃地点及びオオコウモリ、イタチの目撃地点、鳥類調査ルート（太線）
 （沖縄県教育委員会、1990を改変）



[調査方法]

調査は車を使って島全体の農道をくまなく走り、目撃された鳥類の記録に努めた(図1)。目撃の際には8倍の双眼鏡も使用した。調査日や時間等は表1のとおりである。なお夜間調査は未実施である。

表1. 調査概要

調査日	天気	時 間	備 考
1月21日	晴	13:00-14:00	島内一周
1月22日	曇	8:00- 9:00	集落周辺
1月23日	晴	13:00-16:00	島内一周
1月24日	曇	15:00-17:00	島内一周
1月25日	曇	13:00-16:00	島内一周
1月26日	晴	7:30- 9:00	島内一周

[調査結果と考察]

(1) 波照間島の鳥類相

調査期間中に目撃された鳥類は鳥類目録に示したように、9目20科（2亜科ふくむ）35種であった。その内訳は留鳥14種、渡り鳥21種（冬鳥11種、旅鳥10種）であった。

八重山諸島の鳥類については、八重山野鳥の会（1983）によって56科294種の野鳥が報告されている。しかし、その報告の中には波照間島からの記録は明確にしめされておらず、野鳥の方言名を紹介した章で島村修氏によって、キジバト、オオクイナ、バン、サギ類など23種の野鳥が波照間島の方言名で紹介されているのにすぎない。

池原（1983）は奄美・沖縄産の鳥類目録の中で、波照間島産と明確に示したシロガシラ、ウグイス、オサハシブトガラスの3種の野鳥を報告し、産地を八重山諸島とおおまかの示した記録も加えるとミフウズラ、バン、セグロアジサシなど22種の野鳥が生息しているとしている。これに前述した島村氏による野鳥の方言名からの記録を加えると波照間島からは32種の野鳥が確認できる。さらに現地で方言名を調査した際に、カラスバトとアカハラダカが識別され、また日本野鳥の会会員の久高将和氏（私信）によってスズガモとキンクロハジロの2種のカモ類が目撃されているので合計36種の鳥類が記録されている。

今回の調査では、35種類の鳥類が確認され、その中でこれまでに記録のないシロハラクイナ、マミチャジナイ、ハシビロガモ、ムネアカタヒバリなど18種（不明種も含む）の鳥類が確認された。したがって、これらを総合すると波照間島からは54種の鳥が記録されることになるものと思われる。

今回の調査は冬期だったので、夏期や秋期・春期の鳥類を確認することはできなかった。また、夜間調査を行うことができなかつたので、夜行性の鳥類（フクロウ類やシギ類等）を確認することはできなかつた。このことから今後継続した調査を進めていくと確認される鳥類は増えることが予想される。しかし、中には過去に記録があるが、既に姿を消した鳥類もいることであろう。

ここで今回の調査で目撃されたいいくつかの鳥類について、各鳥類ごとにみてみよう。なお島での方言名もつけ加えた。

ア) カイツブリ類

カイツブリが島北西側のため池で6羽目撃された。沖縄ではほとんどの島で留鳥であるので、ここでも留鳥として生息しているものと思われる。

イ) ワシタカ類

ツミ、サシバ、チョウゲンボウ（写真1）の3種を確認した。サシバとチョウゲンボウは沖縄でふつうに見られる旅鳥及び冬鳥である。ツミはおそらく留鳥であろう。方言名を

調査した際に、サシバは島では「タカ」と呼ばれているが、サシバの前に渡ってくる小型のタカの存在が知られ、「タカマー」(タカの前の意)と呼ばれている。このタカ類はおそらくサシバの渡るひと月前の9月はじめ(白露の頃)に渡来するアカハラダカのことであろうと思われる。

ウ) サギ類

コサギ、チュウサギ、アマサギ、クロサギの4種が確認された。方言名にはゴイサギもでてくるので、5種のサギ類が確認できる。沖縄ではクロサギを除いて、他のシギ類は旅鳥及び冬鳥である。

サギ類は方言で「ソーンサミヤー」と呼ばれ、海岸にすむクロサギは「イナーサン」と呼ばれる。これは前述した島村氏の報告にも出てくる。

エ) シギ類

イソシギ4羽、クサシギ1羽の2種が島北西のため池で目撃された。沖縄ではこの2種は旅鳥か冬鳥である。

オ) チドリ類

ムナグロ6羽とチドリの一種が、1羽最南端の碑近くの草地や道路脇で目撃された。チドリの一種は目撃時間が夕刻で、種の同定までは至るなかったが、シロチドリの可能性がある。なおムナグロは沖縄では旅鳥とされる。

カ) クイナ類

シロハラクイナとバンの2種が確認された。2種とも沖縄では留鳥である。八重山諸島にはオオクイナが生息するが、この島でも生息していると思われ、方言名で「ファードル」と呼ばれる。しかし、生息確認することはできなかった。

バンは方言で「タナクッピラー」と呼ばれ、「タナ」は水田のことであるので、島内に水田が多かったころにはふつうに生息していたと思われる。

しかし、シロハラクイナは方言名が出てこないので、比較的近年から生息しているものと考えられた。この鳥は島の人もありみかけないという。

キ) ツグミ類

シロハラ、マミチャジナイ(写真2)、ツグミの1種を確認した。全て沖縄では冬鳥である。種が特定できなかったツグミの1種についてはキビ畑でしばしば遭遇し目撃されたが、種を特定するまでには至らなかった。しかし、体色が黒褐色かかることからツグミの可能性がある。この中でマミチャジナイは波照間島からの初確認であろう。

ク) ヒタキ類

ノゴマ、セッカの2種が目撃された。ノゴマは沖縄に冬鳥としてふつうに渡来するが姿を見ることはまれである。セッカは留鳥で「ガヤブリヤ」と方言で呼ばれる。これは島村

氏も同様の報告をしている。

ケ) カモ類

カモ類ではハシビロガモ（写真3）のみが確認された。久高将和氏（私信）によるとスズガモやキンクロハジロなどを波照間島で目撃している。島には農業用のため池がいくつか見られるので、調査期間を広げればさらに多くのカモ類を確認できるものと思われる。

カモ類の方言名は「ガードウル」。

コ) カツオドリ

最南端の碑近くの海上で1羽目撃した。波照間島の北西海上に仲の神島があり、ここではカツオドリがふつうに繁殖していることが報告されているので、この島から漂鳥として渡来した個体が目撃されたのであろう。

サ) モズ類

アカモズ（写真4）が1羽観察された。沖縄ではモズ類は冬鳥とされるが、先島では夏場も見られる亞種シマアカモズが生息しているので、本種もシマアカモズと思われる。

シ) ムシクイ類

ウグイスとムシクイの一種を確認した。ウグイスは調査期間中1羽だけの確認であり、数はそう多くないと考えられた。他の島では冬場は数が多くなり、ふつうに目撃できる留鳥であるが、この島で留鳥かどうかは調査期間が短いため確認できなかった。クムシクイの一種についてはしげみに入ってしまい種の特定には至らなかった。

セ) ホオジロ類

ホオジロ類の不明種が空港東側の防風林近くで1羽目撃されたが、アオジの可能性がある。アオジは冬期に沖縄に普通に見られる冬鳥である。

ソ) ハト類

キジバト（方言名でパトン）だけが数多く確認された。島の人聞くと、オオパト（アオバト）とフウーパト（クロバト）が識別されているので、3種のハトが生息しているものと考えられる。クロバトつまりカラスバトが確認されていることは興味深い。

図版1：波照間島で観察された鳥類

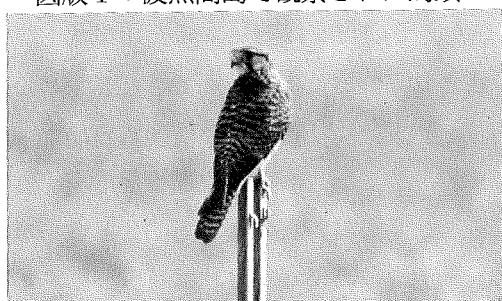


写真1：チョウウゲンボウ

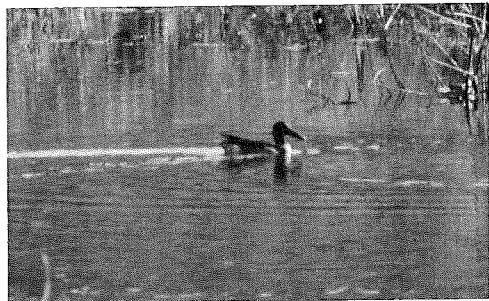


写真2：ハシビロガモ（♂）



写真3：マミチャジナイ



写真4：アカモズ

1、生態的に興味深い観察記録及び未確認の種

確認された鳥類のいくつかについては、生態的に興味深い観察がされ、また他の島では普通に生息する鳥類が、この島では全く観察することができなかった種や種の扱いに検討を要する種がいくつかのあった。

以下生態的に興味ある観察がされた鳥類や未確認の鳥類等について言及する。

a) オサハシブトガラス >

島の北側のチリ捨て場で68羽、製糖工場近くの防風林で30羽以上、最南端の碑近くで20羽以上、南岸の牧場近くで12羽、島中央部の集落周辺で20羽以上目撃したので、おおよそ150羽以上生息しているものと思われる。この数はどの野鳥よりも多く、この島で最も優占して生息しているものと考えられた。

また、この種については生態的に興味深い観察がされた。それは最南端の碑に隣接するキビ畑でサトウキビへの加害が目撲されたことである（図1）。

調査期間中の1月21日に日没近くの夕刻6時頃、キビ畑に三々五々数羽集まつたハシブトガラスは、キビの中央部位を外皮だけを残し、中をくり貫くようについばんでいた（写真5～8）。そして、纖維もろとも丸飲みにしていた。その食痕は一見ネズミ類がサトウキビを摂食する食痕にも似ているが、表皮が薄く残されていることで区別できる。キビの中央部位がくり貫かれ空洞化することで、その個所が弱くなり、採食した部位から風によって倒れてしまうサトウキビが10数本見られた。

島の人にカラスによるサトウキビの加害を訪ねると、全くないとの返事で、サトウキビはオオコウモリが食べているということであった。確かに、高良（1981）は石垣島でオオコウモリによるサトウキビの加害を報告している。波照間にも後述するようにヤエヤマオ

図版2：サトウキビを加害するオサハシブトガラス

写真5 キビを採食するカラス(1)



写真6 キビを採食とするカラス(2)



写真7 食痕1



写真8 食痕2



オコウモリが生息しているので、この島でも加害されている可能性は否定できない。しかし、カラスによる採食時間が日没前後の夕刻であるため、その加害が目撃されていないことや食痕がネズミの食害に似ているため、加害が気づかれていないことによるものとも考えられる。その結果、夜間活動するオオコウモリによる加害とされている可能性がある。

サトウキビの加害は島内で1ヶ所だけで確認され、しかも範囲は畠の一部分にとどまり小規模であるので、島全体にまでは広がっていないように思える。しかし、短期間の調査であるのでその実態を明らかすることはできなかった。したがって、今後追跡調査の必要があるものと考えられる。

b) 混群

沖縄では冬期の非繁殖にメジロを中心とする違う種類の鳥類が集まって混群を形成する。沖縄島北部でメジロ、ヒヨドリ、シジュウカラ、サンショウクイ、ヤマガラ、ウグイス、コゲラなど7種で構成された混群が見られる。しかし、ここではメジロとシロガシラの2種、メジロとヒヨドリ、シロガシラの3種の混群が認められた。つまりカラ類やキツツキ類を欠く混群となっている。森林の豊かな時代にはカラ類やキツツキ類も加わった混

群であったと考えられるが、森林が少なくなった今日では混群は単純化していることが考えられた。しかし、そのことを示す資料はえられていない。

なお、シロガシラについては島の人の話しによると戦前はいなかつたということで、戦後台湾などから侵入したことがうかがえる。

琉球列島産のシロガシラについては、中村・花輪（1987）によって詳細に検討されている。同報告によると日本鳥学会（1974）によってこれまで南琉球の八重山地方（石垣島・西表島・小浜島・黒島・波照間島・与那国島）産はヤエヤマシロガシラ（*Pycnonotus sinensis orii*）が生息するとされていたが、亜種を検討した結果、八重山群島群は orii 型（亜種 *Pycnonotus sinensis orii*）と kobayasi 型（亜種 *Pycnonotus sinensis kobayasi*）が混在し多型化していることが指摘されている。したがって、亜種の詳細な検討の必要があるものと思われるが、ここでは特に検討を行っていないのでシロガシラ（*Pycnonotus sp.*）としてあつかった。

2、未確認の鳥類

生息分布の可能性があるが確認できなかった鳥類には、夏鳥のアジサシ類、アカショウビン、サンコウチョウなどの他、方言名でてくるゴイサギ、リュウキュウヨシゴイ、ウ類、ツバメ類、ミサゴ、オオクイナ、フクロウ類などであった。その中で他の沖縄の島々でごくふつうに生息し、しか�数も多いが、この島で確認できなかつた 2 種について考察する。

a) イソヒヨドリ

この種は沖縄の他の島々にはごくふつうに留鳥として生息するが、6 日間の調査で目撃することができなかつた。

イソヒヨドリの生息について、島の人聞くと海岸近くでたまに見たことがあるとのことであるので、ごく小数の個体群が生息していることが考えられる。しかし、短期間の調査ではあるが、6 日間で 1 羽も確認できなかつたので、繁殖個体群が常在しているとは考えにくい面がある。したがって、この島にこの鳥が常在して生息していないことは、前に述べたようにこの島にはオサハシブトガラスが優占的に生息しており、海岸の岩棚や民家近くの倉庫、畜舎の屋根のすきまなどに営巣するイソヒヨドリの育雛期にカラスによる捕食圧があり、その結果数が減少したことが考えられる。しかし、そのことを証明する資料はえられておらず、また別の要因があることも考えられる。別の要因としては、後述するようにこの島にはイタチが定着しており、イタチによる捕食圧も予想できる。しかし、その証拠は今のところ認められておらず、今後詳細な調査をすすめる必要がある。

b) リュウキュウツバメ

イソヒヨドリと同様、沖縄の他の島々にはごくふつうに留鳥として生息するが、6日間の調査では目撃することができなかった。

この島でリュウキュウツバメが生息しない理由が、イソヒヨドリと同様オサハシブトカラスの優占的な生息分布となんらかの関連があると思われるが、そのことを示す資料は得られていない。しかし、この鳥は巣を守るためにカラスやワシタカ類に対し集団で防御行動（モビング行動）をとることが経験的に知られている。したがって、ハシブトガラスが育雛期に雛を襲う可能性が考えられ、生態的な影響が予想される。

(2) 波照間で目撲された哺乳類

6日間の鳥類調査と平行して、同様な調査方法で哺乳類を調査した結果、哺乳類目録に示したようにヤエヤマオオコウモリとイタチの2種の哺乳類を確認した。

以下その記録を示す。

a) オオコウモリ

目撲したオオコウモリは、ヤエヤマオオコウモリと思われ、島の北海岸に面する下田原遺跡近くで、当真嗣一博物館職員により1頭、名石集落で筆者により1頭目撲された（図1）。また、波照間小学校体育館裏のアコウの木の下で、アコウの果実を採食した食痕（ペリット）を数多く観察したので、少数の個体群が生息していると思われる。島の方言では「カプドゥリ」と呼ばれている。

この島の北側海岸近くの下田原遺跡（約3500年前）から発掘された哺乳類の遺物にはリュウキュウイノシシ、クジラの仲間、ジュゴン、クマネズミの仲間、オオコウモリの4種が検出されている（沖縄県教育委員会、1986）。オオコウモリは当時からこの島で生息し、食料にされたと考えられる。しかし、現生種との関連は不明である。

b) ニホンイタチ

ニホンイタチは島の南側にある小さな岩礁海岸で、海岸に張り出すノッチの上に形成されたミズガンピのしげみの中で、餌を探していた1個体を目撲した（図1）。

ニホンイタチはサトウキビを加害するネズミを駆除する目的で、波照間島に1966年11月から1968年1月までに雄299頭、雌49頭の計348頭が移入された（Uchida, 1969）。したがって、移入から24年もたっているが、ニホンイタチはこの島に適応し、種を存続させていることが示唆された。このような状況は北大東島（宮城ら、1992）でも確認されており、また宮古島でも定着していることを筆者は目撲している。

<ネズミ類>

ネズミ類についてはハツカネズミの仲間やクマネズミなども生息していると思われる

が、確認することはできなかった。今後トラップ等を使用し、捕獲するなど詳細な調査が必要であろう。

〔謝辞〕

この調査をすすめるにあたり、調査に便宜を図っていただいた竹富町教育委員会に対し御礼申しあげる。また鳥類の方言名等について教示をいただいた竹富町文化財審議委員の新城佑康氏に感謝申し上げる。

〔要約〕

- 1、1993年1月に波照間島で鳥類と哺乳類の調査を行い、鳥類35種と哺乳類2種を確認した。
- 2、鳥類の中でオサハシブトガラスは島で優占的に生息し、またサトウキビを加害することを観察した。
- 3、沖縄の他の島でごくふつう生息する留鳥のイソヒヨドリとリュウキュウツバメが、全く生息確認できなかった。

[文献]

- 沖縄県教育委員会、1986. 下田原貝塚・大泊浜貝塚、第1・2・3次発掘調査報告
:156pp.
- 八重山野鳥の会、1983. 10周年記念誌、八重山野鳥の会:75pp.
- 池原貞雄、1983。奄美・沖縄鳥類目録、写真集沖縄の野鳥；琉球新報社：54-62.
- 中村一恵・花輪伸一、1987。琉球諸島産シロガシラの分類と分布変遷、昭和61年度環境
庁委託調査、特殊鳥類調査（ノグチゲラ・ヤエヤマシロガシラ）。日本野鳥の会:39
-58。
- 高良鉄夫、1981。於茂登岳及び周辺地域の動物相、沖縄県自然環境保全地域指定候補地
学術調査報告、於茂登岳及び周辺地域、沖縄県:143-159.
- 宮城邦治・嵩原建二、1992。北大東島の鳥類と哺乳類、沖縄県天然記念物調査シリーズ
第31集；ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書、沖縄県教育委員会：53
-62.
- Uchida, T.A. 1969. Rat-control procedures on the Pacific islands, with special
reference to the efficiency of biological control agents. II. Efficiency of the
Japanese weasel, *Mustela sibirica itatsi* Temminck & Schlegel, as a Rat-
control agent in the Ryukyus.
- 沖縄県教育庁文化課、1990. 沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ八重山諸島の道。沖縄県教育
委員会、222.
- 今泉吉典、1976. 原色日本哺乳類図鑑、保育社、171.

波照間島で観察された鳥類目録

(1993年1月20日から1月26日までの観察記録)

カツブリ目 PODICIPEDFORMES

カツブリ科 PODICIPITIDAE

- 1 カツブリ *Podiceps ruficollis poggei* (Reichenow)
製糖工場近くのため池、6羽（1／23）
富嘉の池、1羽（1／26）

ペリカン目 PELECANIFORMES

カツオドリ科 SULIDAE

- 2 カツオドリ *Sula leucogaster plotus* (Forster)
最南端の碑南海上、1羽（1／25）

コウノトリ目 CICONIIFORMES

サギ科 ARDEIDAE

- 3 アマサギ *Bubulcus ibis coromandus* (Boddaert)
島南東側の畜舎、4羽（1／23）
- 4 コサギ *Egretta garzetta garzetta* (Linnaeus)
富嘉集落北側、1羽（1／23）
- 5 チュウサギ *Egretta intermedia intermedia* (Wagler)
空港近くの農地、1羽（1／26）
- 6 クロサギ *Egretta sacra sacra* (Gmelin)
製糖工場近く北の海岸、2羽（白色型）（1／23）

ガンカモ目 ANSERIFORMES

ガンカモ科 ANATIDAE

- 7 ハシビロガモ *Anas clypeata* (Linnaeus)
富嘉集落南側ため池、雄1羽（1／23）

ワシタカ目 FALCONIFORMES

ワシタカ科 ACCIPITRIDAE

- 8 リュウキュウツミ *Accipiter gularis iwasakii* (Mashima)
喜多集落の御嶽、1羽、喜多集落上空、2羽（1／23）
-

-
- 9 サシバ *Butastur indicus* (Gmelin)
空港近くの農地、1羽（島内で最高5羽目撃）（1／23）
- ハヤブサ科 FALCONIDAE
- 10 チョウゲンボウ *Falco tinnuncius innterstinctus* (Horsfield)
空港近くの農地、2羽（島内で最高7羽）（1／23）
- ツル目 GRUIFORMES
　　ミフウズラ科 TURNICIDAE
- 11 ミフウズラ *Turnix suscitator okinavensis* (Phillips)
土地改良の碑近くの農道、1羽（1／21）
- クイナ科 RALLIDAE
- 12 シロハラクイナ *Amaurornis phoenicurus chinensis* (Boddaert)
燈台近くギンネムン林、1羽（1／21）
- 13 バン *Gallinula chloropus indica* (Blyth)
富嘉集落南側ため池、3羽（1／23）
- チドリ目 CHARADRIIFORMES
　　チドリ科 CHARADRIIDAE
- 14 チドリの一種 *Charadrius* sp.
最南端に碑近く道路、1羽（1／23）
- 15 ムナグロ *Pluvialis dominica fulva* (Gmelin)
最南端に碑近く草地、6羽（1／23）
- シギ科 SCOLOPACIDAE
- 16 イソシギ *Tringa hypoleucos* (Linnaeus)
富嘉集落北側ため池、3羽（1／23）
- 17 クサシギ *Tringa ochropus* (Linnaeus)
富嘉集落北側ため池、1羽（1／23）

-
- ハト目 COLUMBIFORMES
ハト科 COLUMBIDAE MONARCHINAE
- 18 リュウキュウキジバト *Streptopelia orientalis stimpsoni* (Stejeger)
喜多集落東側御嶽林、5羽

- スズメ目 PASSERIFORMES
セキレイ科 MOTACILLIDAE
- 19 キセキレイ *Motacilla cinerea robusta* (Brehm)
名石集落、1羽 (1/23)
- 20 ムネアカタヒバリ *Anthus cervinus* (Pallas)
空港草地、2羽 (1/25)

- ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE
- 21 タイワンヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis amaurotis* (Temminck)
製糖工場近くの森林、3羽 (1/23)
- 22 シロガシラの一種 *Pycnonotus* sp.
製糖工場近くの森林、3羽 (1/23)
(島内各地で見られる。)

- モズ科 LANIIDAE
- 23 シマアカモズ *Lanius cristatus lucionensis* (Linnaeus)
名石集落はずれの農地、1羽 (1/26)

- ヒタキ科 MUSCICADAE
ツグミ亜科 TURDINAE
- 24 ノゴマ *Erithacus calliope* (Pallas)
塵捨て場近く低木林、雌1羽 (1/26)
- 25 ヒタキの一種 *Erithacus* sp.
塵捨て場近く低木林、1羽 (1/21)
- 26 シロハラ *Turdus pallidus* (Gmelin)
名石集落御嶽林、2羽 (1/21)
- 27 マミチャジナイ *Turdus obscurus* (Gmelin)
富嘉集落、1羽 (1/23)

- 28 ツグミの一種 *Turdus* sp.
空港南側農地、1羽（1／26）

ウグイス亜科 SYLVIINAE

- 29 リュウキュウウグイス *Cettia diphone riukiuensis* (Kuroda)
富嘉集落北側森林、1羽（少ない）（1／23）
- 30 セッカ *Cisticola juncidis brunneiceps* (Temminck & Schlegel)
名石集落北側農地、1羽（1／23）
- 31 ムシクイの一種 *Phylloscopus* sp.
大気観測モニター施設近く、1羽（1／21）

メジロ科 ZOSTEROPIDAE

- 32 リュウキュウメジロ *Zosterops japonica loochooensis* (Tristram)
製糖工場近く、3羽（1／23）

ホオジロ科 EMBERIZIDAE

- 33 ホオジロの一種 *Emberiza* sp.
大気観測モニター施設近く、1羽（1／21）

ハタオリドリ科 PLOCEIDAE

- 34 スズメ *Passer montanus* (Stejneger)
名石集落、20羽以上（多い）（1／21）

カラス科 CORVIDAE

- 35 オサハシブトガラス *Corvus macrorhynchos* (Osai Ogawa)
名石集落、20羽以上、チリ捨て場、68羽（かなり多い）（1／26）
-

波照間で目撃された哺乳類目録

大翼手亜目 MEGACHIROPTERA

オオコウモリ科 PTEROPODIDAE

ヤエヤマオオコウモリ *Pteropus dasymallus yaeyamae*

1993／1／22 下田原遺跡 (1頭), 名石集落, (1頭)

1993／1／25 名石集落 1頭

食肉目 CARNIVORA

イタチ科 MUSTELIDAE

ホンドイタチ *Mustela sibirica itatsi*

1993／1／26 南海岸 1頭
